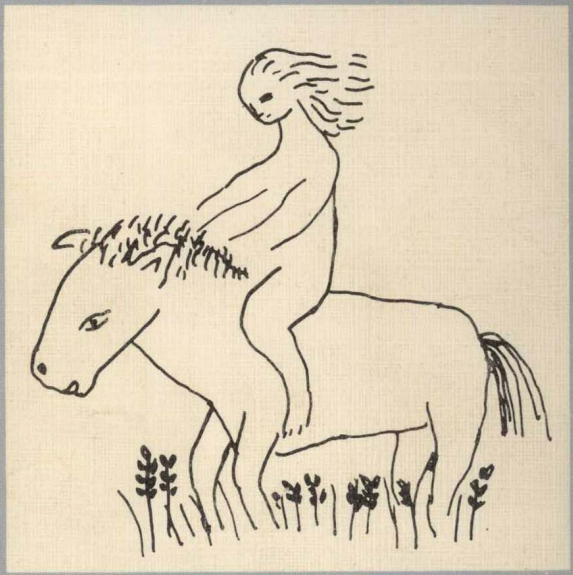
青春の休み時間　三木 卓



青春の休み時間

三木 卓

集英社

青春の休み時間

1976年6月25日　第1刷
1976年8月25日　第2刷

定　価　830円
著　者　三木　卓
発行者　堀内末男

発行所　株式会社　集英社
〒101　東京都千代田区一ツ橋 2—5—10
電話　東京　03—230—6361（編集）
230—6171（販売）

印刷所　中央精版印刷株式会社

落丁，乱丁の本はお取り替えします

© 1976 T. MIKI
Printed in Japan
0095—772047—3041

青春の休み時間＊目次

PART I

9……ビートルズとの対話
37……スティービー・ワンダーとの出会い
43……ポール・サイモンの詩をめぐって
56……人の世を支える声
62……二人のシンガー・ソング・ライター
67……津軽三味線の魅惑
72……ロシア音楽とわたし
76……チャイコフスキー雑感

PART II

85……童話を読もう
90……ブラッドベリの夜

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

96 ……わたしにとってのファンタジー
99 ……読書のよろこび
102 ……プーシキンの偉大さ
105 ……レールモントフの死
107 ……チェーホフを読み直して
110 ……トルストイの日記をめぐって
114 ……五木寛之『内灘夫人』
121 ……自由と言葉あそび
128 ……シリトーの《口惜しさ》
134 ……非モンロー主義者のモンロー観
140 ……青いピカソ
145 ……落語の世界
150 ……〈来迎図〉の語ること

PART III

159 ……幸福のイメージ
167 ……愛の背後にあるもの
177 ……劣等感はすばらしい
188 ……男はなぜ結婚するのか
199 ……人にたよることについて
206 ……自らの支配者になろう
209 ……遊ぶ、生きる
214 ……青春の純粋さ
222 ……あとがき
224 ……初出一覧

青春の休み時間

装幀　佐野洋子

PART I

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb

ビートルズとの対話

吟遊詩人の復活

『イエロー・サブマリン』という、ビートルズが声で出演しているアニメーションの映画があった。先日、やっとテレビでこの映画を見ておもしろかったので、そのことからはじめよう。

この映画のアニメーションがなかなかのものだ、ということは前から若い友人たちから聞いていた。しかし、だからといってすぐに見にいこう、という気になれなかったのは、この種のアニメーションの背景になっている流行の美学にわたしがなじみにくいものを感じていたせいもあるかもしれない。いわゆるサイケデリックな調子とか、ポップ・アートとかいわれた、今や流行遅れになってしまった、あれである。

人間の美意識などというものは頑固なもので、その流行遅れの美よりも、すでにその時点ではるかに流行遅れになっていたわたしには、正直いって、或る楽しさや快さを感じはするが同時に、親しみにくい、しっくりこない感じがあることは否めなかった。だが、今度見て、この映画を見たひとがみな「おどろいたぜ」というわけがわかった。

やや時代遅れの美学の映画を、二段階時代遅れのわたしが見たのだったが、この映画はたしかに新鮮である。はじまりからいきなりひきつけられて、そのまま見てしまった。

筋などは類型的なものである。物語中で、表面的に構成上必要なために語られているような考えも、考えというほどでもない単純なものである。そういうところから見ていくとこの映画はつまらなくなってしまう。

アニメーターの存在を感じた。それは、イメージの噴き出してくるような多彩さにも、意表をつくような形象にも、生々としたユーモアにもある。

偉大であるとか、雄大であるとか、荘厳であるとか、いうものではない。ただ感じることは、画面が共同の意識とかかわりを持ちながら十分に生きている、ということである。生きている、ということは、個性的である、ということであり、個性的であることが、表現の必然とつながっている、ということである。

それは、われわれが持っている、そもそもはとても感じやすい部分なのに、まだ今までそこでもの

を感じるという体験をしたことがない、という場所を、そっと羽根のようなもので撫でていってもらった、という感覚だった。

そのことが、わたしに色あせたものと感じさせない理由だったのだろうか。あの悪の執行者であるロケット付手袋（グローブ）の邪気ある無邪気な活躍ぶりなど、いつまでも忘れられないだろう。

そして、そのアニメーターの心は、間接・直接にビートルズのキャラクターとわたりあっている。ビートルズの世界を自分のやり方で深め、ひろげていこうとし、その結果、ひとつのビートルズ観をそこへ提出することになっていると思う。映画を見ながらビートルズの歌を聞きながら、そんなことを思っていた。

ビートルズを、はじめて聞いたのは何時のことだったろうか。

ロックについては案外冷淡だった。エルヴィス・プレスリーなどに熱狂する世代だったはずなのだけれども、その頃はクラシックを聞いていた。

ビートルズについても、一九六六年にかれらが日本にやってくるまでは関心がなかった。来日の時の関心も、ファンが猛烈で、危ないからまず観客の第一列に警官がならぶ、といったことなどにひっぱられたもので、新聞記事的であった。

「ちゃんと音楽が聞きたかったらレコードを買ってくれ」などという演奏会に対するペシミズムをむき出しにしたひねくれ方とか、「好きな作曲家はジョン・レノンだ」などという不遜と見られるかも

しれないいいかたにも、興味を抱いた。今ならなんとも思わないことかもしれないけれども、あの頃はまだ、そんな若者のものいいに馴れてないだけに刺戟的だった。

そんなわけであの時の演奏会に行くことはなくて、消極的にテレビで見聞するにとどまった。あまり長い時間ではなかったと思う。今、思い出してみると、汗をかいて熱演していたのは、たしかポール・マッカートニーだ。かれも、そしてほかの三人も、熱狂的な日本の娘さんたちの声援ぶりに恐れを感じているように見えた。そして、しかつめらしい警官たちにむかってうたっているようで、おかしかった。

音楽もよくわかるとはいえなかった。わたしも馴れていなかったのだ。しかし、このとても一筋縄ではいきそうもない若者たちの演奏ぶりを見ているとなんとなく、おもしろさが感じられた。妻と二人で見ていて「これは中世の吟遊詩人の復活というかたちになってるんだな」といいあったことをおぼえている。

そこで、当時、わたしは時事的なものを素材にした詩を週一回ずつ書いていたので、ビートルズをとりあげてみた。それが「イエスタデイ」という詩である。のったのは、社会党の機関紙「社会新報」六六年七月十七日号であった。

イエスタデイ

リヴァプールからの
四人の若者　吟遊詩人
詰めかけた警官にむかい　歌をうたう
ああと　うめいた娘たち
ハンケチ振り　キイという
リンゴオはスタア
スタアキング！
ペートルとは何ものだ？
えて公の音楽じゃ……
勲章もらっているから　芸術家だよ
だが四人の若者　吟遊詩人
としよりなんざ　どうでもよい
好きな作曲家？　レノンです　はい
聞きたい人は　レコード買ってね……
とり残されたは　娘たち
涙ふきふき　固く誓う

たとえこの身は　おばあに　なりましょうと
かれらを愛しつづけるわ　一生よ

今はこういう詩は書けそうになくなっているが、当時は毎週書いていた。ビートルズに対して好意を持っていたことはわかるが、多分に外面的で、やっぱり音楽とは関係がない詩である。

この中で、「リンゴオはスタア／スタアキング！」という駄洒落が気に入っていたが、そのうちにかれらはアップルなどという会社をつくってしまった。リンゴー・スターは、日本語でアップルをなんと呼ぶか、滞日中に聞いたのだろうか。

それからビートルズとの付合いが、きれぎれながら続いてきた。六八年につとめていた会社が倒産して失職したとき、やらせてもらった最初のアルバイトが、ビートルズの伝記の翻訳を本にする、編集の仕事だった。

それから、ビートルズが解散してからジョン・レノンが出した二枚のLPの歌詞を日本語にする仕事もした。

専門の詩の雑誌のビートルズ特集で、十篇ほど訳した。

要求があってしたことではあるが、ビートルズは好きかきらいか、ときかれたら、それは好きだし惹かれているということだ。このひとたちの演奏は、あまり上手ではないみたいだが、つくった曲に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongb